にじいろにんぎょ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にじいろにんぎょ

【Ｎコード】
Ｎ６０９２Ｆ

【作者名】
久芳

【あらすじ】
雨の日がくるたびに、人魚は空を見上げる。尾びれを失った人魚とともに暮らし始めたタケルは、彼女と言葉を交わすうちに、自分の中にある「世界」と向き合い始めることになる。

1

雨の日がくるたびに、人魚はじっと、空を見上げていた。
「……人魚、腹減らないか？」
そう呼びかけるタケルたち人間と同じ、二本の脚を抱えて、腰まで届く漆黒の髪を床にたらして。青とも緑ともつかない瞳はたえず、雨雲を見つめている。
古くて狭くて汚いこのアパートは、家賃が安いことと、ベランダから海が見えるのが自慢だった。
「聞いてるか？　朝飯食べてないだろ？」
着丈の長いTシャツをワンピースのかわりにして、彼女は膝を抱えたまま、ころんと横になる。いぜん瞳は空を見たまま。呼びかけを無視するその背中を、タケルはつま先で軽く小突いた。
「おにぎりつくったから、とりあえず食おうぜ。腹減っただろ？」
おーい、と、わき腹をくすぐってみる。彼女の弱点はわき腹で、そこをくすぐればいつも逃げようとする。今日の人魚はたいした抵抗もなく、起き上がってタケルを見上げた。
「……おなか、へった」
「だから飯食おうってば」
口数は少ないが、声は可愛い。空いた隣に座って、皿を置くと、人魚はすぐにとびついた。ただの握り飯にがっつくところを見ると、そうとう我慢していたのだろう。
「しょっぱくないか？」
「……すっぱい」
「それは梅干し」
さすがに人魚に鮭やタラコを食べさせるわけにはいかない。目尻

と唇をしわしわにしても綺麗な顔立ちをした彼女に、タケルは麦茶を差し出した。
「他に具、ないんだ。塩むすびよりマシかと思ったけど、いやだったか？」
「大丈夫」
でも顔はすっぱそうだ。
男の大きな手でつくったから、おにぎりも大きい。そして形が悪い。それをぺろりとたいらげて二つ目に手を伸ばす人魚は、タケルに負けず劣らずの大食いだった。
食事をしているときでも、彼女は空を見続けている。まだあどけなさの残る横顔が、すっぱそうででも悲しそうで、見つめているとふいにこちらを向いたのでどきりとした。
「タケル、台風が来たね」
人魚はそう言うが、空を見るかぎりまだ激しい雨は降っていない。しとしとと雨音がして、夏だというのに肌寒い。しっかり服を着込むタケルとは正反対に薄着の人魚は、空から視線を外し、顔を出した梅干にびくびくしながらもおにぎりをかじった。
「今日、上陸するってテレビでやってたんだけどな……なんか、温帯低気圧になった気がする」
「ううん、これから、荒れるよ」
人魚の天気予報は百発百中で、雨が降るといえば降り、やむといえばやむ。だから今日はこれから荒れるのだろう。
「今日も、だめかな」
「最初からあきらめるなって。もしかしたら、台風と一緒に来るかもしれない」
ネガティブになるなよ、と頭を撫でても、人魚は唇をとがらせたままだった。
こんなぼろアパートでは、いつか雨風に耐え切れずに窓ガラスが割れてしまう。だから台風にはこのまま温帯低気圧に変わってほしいけど、そんなことは口が裂けても言ってはいけない。タケルはい

じける人魚のほっぺをつつき、目が合うとにこっと笑ってみせた。
「久しぶりに一杯やるか」
人魚が饒舌になる方法を知っておくと、こういうとき便利だった。

2

○

人魚と暮らすようになって一月がすぎた。

自分と同じ、十六、七の年頃の女の子と二人暮らしをするなんてどうかと思うけど、彼女は他に行くところがないし、陸上生活をすることになったのはもとはといえばタケルのせいなのだ。

先月、タケルは海でおぼれた。

台風が来て危ないから、海岸に住む人は注意しろと言われていた。でもタケルは、暴風雨の中外に出て、アパートのまん前にある防波堤の上に立っていた。そうしたら高波が来て、タケルは抵抗する間もなく、荒れ狂う海に飲みこまれたのだ。

この海は岩場が多く、波の流れも勢いも激しい場所で、岩に頭をぶつけて気が遠のいたと思ったら、いつの間にか深みの底に転がっていた。頭を切ったらしく、血が視界の端を漂っている。タケルは海の底にいるのにさして苦しいとも思わず、ただ冷静に自分のおかれている状況について考えていた。

海の底は案外静かで、海面近くで荒れ狂う、波の騒々しさを客観的に眺めることができる。閉じこもる自分の部屋以外にも、こんなに静かなところがあるとは知らなかった。

頭をぶつけたせいなのか、身体が思うように動かない。息はとっくに尽きていて、肺に流れ込む海水に、溺死、という言葉が頭に浮かんだ。

そしてタケルがそれを受け入れようとしたとき、人魚が現れたのだ。

豊かに波打つ髪を海いっぱいに広げて、一糸まとわぬ身体は抜けるほど白くて、虹色に輝く尾びれで力強く泳ぎ、あっという間にタ

ケルに空気を与え、海面へと連れて行った。
人魚は何も言わず、ただ一心に、タケルを助けるためだけに浜へと泳いだ。海の底と違って、海面はそれこそ本当に雨嵐で、高い波を巧みにかわしながら彼女は浅瀬までたどり着いた。自力で防波堤に登ったタケルを確認して、再び海に戻ろうとして、そこで彼女は自分の身体の異変に気づいたのだ。
人魚は尾びれに傷をつけていた。
傷口を波が撫でたとき、鱗がはがれた。一枚はがれると、もう止まらなくて、あっという間に人魚は、虹色の下半身を失い、残ったのは人間と同じ二本の脚だった。
艶と光沢と、虹色の輝きを持っていた鱗はもろく崩れ、波にさらわれ、しぶきとともに空に舞った。
そのときの人魚の泣き出しそうな顔は、今でも忘れられない。
こうしてタケルは、人魚とともに、暮らすことになったのだ。

「――なぁ、人魚」
彼女は基本、無口だった。人間の言葉を知らないわけではなく、むしろ彼女は他の国の言葉も知っているようだった。ただ単に恥ずかしがりやなだけで、質問をすればちゃんと答えてくれるのだ。
ただ、名前だけは、わからない。何度か教えてもらったのだけど、それは人魚の言葉なのか、人間の言葉にはうまく置き換えられない。勝手に名前を付けるのもはばかられて、タケルはそのまま、人魚、と呼んでいた。
「人魚ってば」
「なーにょぅ」
だらんと伸びた語尾とともに、ひっく、としゃっくりが聞こえた。
「飲もうって言ったのはタケルじゃない」
人魚にとって、酒は牛乳なのだろうか。彼女は、コップ一杯の低脂肪牛乳で見事に酔っ払っていた。
ふたりで、ベランダの窓の前に座り、次第に強くなってくる雨を

眺める。それぞれ手に持つガラスのコップには、牛乳。床に直接、牛乳パックと麦茶の瓶が置いてある。
ほんのりと頬を染める人魚は、水をはった洗面器に足を突っ込んでいた。
「おかわりちょうだい、おかわり」
ぐびっと残りを飲み干し、彼女は白く濁ったコップを差し出してくる。その鼻の下には白いひげができていて、手首でぬぐう姿は女子にあるまじき行為。けれど、かわいい。
「タケルも、もっと飲んでよぉ」
「俺は飲みすぎると腹壊すんだ」
二杯目の牛乳を渡し、タケルは麦茶に切り替えた。
すっかり出来上がっている人魚は、身体をゆらゆらと動かし、上機嫌に歌をうたっていた。人魚の歌なのかと思ったが、どうやら英語のようだ。何の歌かはわからないものの、賛美歌のようなものではと推測する。
人魚の言うとおり、天候は少しずつ悪くなってきたようだ。時折、風が鳴いている。白波をたてる海は、初めて彼女に出会った海を連想させた。

3

「ねーえ、タケル」
猫のように甘える声を出し、人魚がフローリングの上に横たわった。
「なんだ？」
呼びかけられたから返事をしたというのに、人魚は何も言わなかった。洗面器から足を出すと、つま先から水が滴る。洗面器の中身は、塩水ではなく、ただの水道水だった。
尾びれを失った彼女に残ったものは、人間の脚。そのつま先の、貝殻のように小さな爪は、あの鱗の名残なのか虹色に光っている。
「ねぇえ、タケル」
「だから、なんだってば」
ごろごろと身体を動かすしぐさは、人魚というより、猫や犬の小動物だ。その長い髪はさわるとやわらかく、風呂に入ってもなお、潮の香りを漂わせていた。
床と頬の間に手を入れて、人魚は上目遣いにタケルを見上げる。吸い込まれそうな瞳に、タケルの身体が意図せずに近づいてゆく。
「ねぇ、タケル」
「だから……」
なんだよ、と言いかけて、タケルは言葉を切った。彼女の細い指が、唇にあてられてさえぎったからだ。
人魚は瞳を閉じ、歌うように唇を開いた。
「どうして、タケルは、海に飛び込んだりしたの？」

○○

どうせ死ぬなら溺死がいい。
そんな考えを持つようになったのは、ずいぶん前からのことだっ

た。
人魚は、タケルがなぜ学校にいっていないのかを訊いてきたりはしなかった。タケルが高校を休学しているのを知っているのか、いや、学校についての仕組みをあまり知らないのかもしれない。働きもせずにひとり暮らしをするその資金源がどこにあるのかも、まったく気にしていなかった。
風呂あがりのタケルの身体を見て、その身体に転々とはびこる、消えることのないやけどの痕を見ても、ただ指で撫でるだけで何も言ってこなかった。その痕を隠すために、暑くても長袖のシャツを着込む姿には、ただ悲しそうに眉をひそめるだけだった。
「タケルは溺れていたとき、苦しかった？」
人魚はタケルの手首をとりながら、そう尋ねてきた。
「苦しかったよ」
高波にさらわれるのと、自分から飛び込んだのと、はたしてどちらが早かっただろう。
荒れ狂う波にもまれて、身体の中の空気をすべて海に吸いだされて、もがくこともなくされるがままになる自分に、これでいいのだという心があった。
死ぬなら溺死がいい。プールは嫌だ。川もあまり好ましくない。望むは、海だ。
海に流され、命尽き果て、朽ちゆく身体はこの海になってしまえばいい。肉は魚や貝のえさになり、骨には海草が根をはればいい。
死体の捜索なんていらない。最後には海の砂になりたい。腐敗した肉が残った状態で、海から上げれば身体がばらばらになるような、そんな醜い姿にはなりたくなかった。
誰にも気づかれずに死にたい。
肉が腐り、骨になり、それも砂になった頃。タケルという名の自分は、この世の中から完全に消えてしまえるから。
大丈夫。自分が失踪したとしても、誰もそれに気づいたりしない。
海に落ちたりしても、それを探してくれる人なんて誰もいないか

ら。
「……どうして人魚は、俺を助けようとしたんだ？」
海の中。朦朧とした意識の中。自分を抱きかかえ、息を与えてくれた彼女の姿だけは、今もはっきりと覚えている。
あのまま死なせてくれればよかったのに。どうせ誰も、自分のことなんて気にしないのだから。
あいかわらずタケルの腕を握ったままの人魚は、タケルではなく、その引きつった傷跡に向かって話しかけているようだった。
「だって……タケルが死んだら、悲しむ人がいるでしょう？」
「そんなの、いないさ」
吐き捨てるようなタケルの言葉に、人魚は一瞬、おびえたように身体をこわばらせた。
「……タケルには、家族がいないの？」
「いるよ。ちゃんと血のつながった父と母と、年の離れたかわいい妹が二人」
いるけれど、いない。自分に近しい人たちであるはずなのに、タケルはその人たちを拒んでいた。
両親は、妹たちと同様に、自分にもたくさんの愛情を注いでくれた。でも今まさに妹たちが受け取る愛と、自分がその年頃のときに受け取っていた愛は、まったくの別物だった。

4

それはもう、過去のこと。わかっているはずなのに忘れられず、タケルは親から距離をとるようになっていた。だから両親もそれを察して、タケルが家から離れたいと言ったときもただ、黙って許可するだけだった。

「家族がいるのに、どうして……？」

「だめなんだ。一緒にいると、怖くて、身体がすくむんだ」

自分はあの頃と違う。身体も大きくなった。今もし、昔と同じようなことをされても、抵抗することができるはず。そうわかっているけど、いざ親を目の前にすると、だめだった。

「小さい頃のことを考えると、抱きしめられたことよりも、煙草を押し付けられたことのほうが先にでてくるんだ」

人魚の視線が、傷跡を追うように、わき腹へと動いていく。タケルはそれに気づかないふりをして、そっと彼女の髪に触れた。

今、ひとり暮らしをしている。その費用はすべて、両親が持っている。そう考えたら自分はまだ恵まれているのかと思うけど、いや、そもそも家族とは一緒に住むべきはずなのに。とにかく自分は、生きることには苦労していなかった。

このアパートに決めた大きな理由は、海が見えることだった。道路をひとつ挟んだら、すぐに防波堤、海。台風が来たらすぐに避難勧告が出る。けれど家に残っていても、誰も声をかけにこないのがとても気に入っている。

「タケルは……私が海に戻れたら、またこの海に飛び込むつもりなんでしょう？」

「……たぶんな」

「どうして？」

「それは……」

うまく、言葉に表すことができない。自分は海で砂になるほうが

いい。言うのは簡単だけど、きっと彼女は納得してくれない。
「お父さんやお母さんに、うまく愛してもらえなかったから？」
「それはもう、昔の話」
「じゃあ、どうして？」
うまく言葉が出てこなくて、タケルは苦笑するしかなかった。
「……ひとりだから、かな」
自分には家族がいる。そうわかっていても、心の中では自分はひとりだと思ってしまう。家族は自分のことなんて気にしていない。だから、自分はひとり。そう、思ってしまう。
そう説明するタケルに、人魚はため息をついて、手を離した。
「私は、ずっと、ひとりだったよ」
「そうなのか？」
初耳だった。そもそも、人魚とこういった類の話をするのは始めてだったのだ。
「小さいときは、みんなと一緒にいたんだけどね。はぐれて、ひとりになっちゃったの……言っとくけど、私はタケルよりもうんと年上なんだからね」
やはり海は、竜宮城のように、時間の流れがゆっくりしているらしい。
「ひとりで、いろんなところに行ったよ。いろんなものを見たよ。でも、ずっとひとりだったなぁ」
ふいに、人魚が起き上がった。そしてタケルのひざに手を乗せ、息がかかるほどに顔を近づけてきた。
「人魚は、ずっとひとりだったのか？」
「そう言ったじゃない」
「ひとりでいる間、どうだった？」
「どう……？」
タケルの問いに、人魚は眉根を寄せてみせた。どうやらすこし、難しかったらしい。
とろりとした瞳。やはり彼女は酔っている。けれどその吐息から

は酒の匂いも、牛乳の匂いもしなかった。あるのは磯の香りだった。
「あの世界は広くて、豊かで、私ひとりには広すぎたわ」
「……戻りたい？」
「戻らないと、生きていけない」
いくら人の姿をしているとはいえ、彼女は人魚だ。一日の大半を、洗面器の中に足を浸して過ごしている。風呂の時間はとても長い。食べられるものも少ない。いくら肺で呼吸ができたとしても、やはりたまに苦しそうにあえいでいる。
「きっとこのまま、鱗が戻らなかったら、私は干からびて死んでしまうんだろうね」
ふふ、と彼女は笑った。
「タケルが望む姿になれるね」
彼女は、皮肉でもなく、ただ自分の考えを呟いただけだったのだろう。
「……人魚は、海に戻りたい？」
「戻りたいような、戻りたくないような」
「また、ひとりになるのが嫌なのか？」
「それも、あるといったらあるけどね」
曖昧にうなずいて、彼女は笑った。
「タケルを残していくのが、ちょっと心配」
窓が、大きく揺れる。風が悲鳴のような声をあげる。叩きつける雨。海が、唸りをあげている。
見つめあっていても、わかる。台風が来た。

5

○○○

人魚が、空に向かって大きく手を広げた。

吹き付ける風、雨、海のうねり。防波堤に打ちつける波の、太鼓にも似たしぶきの音。

タケルは懸命に、人魚の背中を追っていた。

虹色の雨が降っている。細かく砕け散ったあの鱗が、海を渡り空に舞い上がり、こうして雨となって——台風となって、戻ってきた。

「人魚……！」

荒れ狂う海にひるみもせず、沖へ沖へと泳いでゆく人魚。砂浜も岩場も、海が飲み込んでしまっていた。彼女を追うタケルは、かろうじて岩に足が届くものの、胸までしっかりと海につかってしまっていた。

「人魚！」

タケルがどんなに呼びかけても、彼女は聞こえないのか、先にすすむばかりだ。虹色の雨に打たれて、着ていたシャツを脱ぎ、裸になった。そして海に溶け込んでゆく雨を、自分の体にしみこませてゆく。

彼女がひとつ、海を泳ぐにつれ、虹色が身体にまとわりついてゆく。むき出しの脚に鱗の破片が絡み、少しずつ、豊かなひれの形をつくってゆく。

「にんぎょ……」

しけた海にもまれながら、タケルはこれ以上先にすすむことがどれだけ危険かを感じていた。けれど決してここから去るまいと、たくさんの海水を飲みながらも心に決めていた。

大きな波に、身体をさらわれる。またあのときのように、海に飲

み込まれそうになる。恐怖は感じない。けれど、人魚を見失うのが怖かった。
「――タケル」
流されそうになったのを助けたのは、やはり彼女だった。
その姿はまだ、人間だった。けれど、とても曖昧だ。人魚に抱きしめられて、タケルもまた、虹色の雨に打たれていた。
「危ないから、戻って」
「……いやだ」
タケルがしがみつくと、人魚は困ったように首をすくめた。
「行かないで、人魚」
「タケル……」
彼女に鱗が戻るまで。それだけの関係だと思っていたのに。
「行かないで。一緒にいて」
ひとりにしないで。
自分から望んでひとりになったはずなのに。なぜいまさら自分は、こんなにも彼女にしがみついているのだろう。
「ずっと、あのアパートで一緒に暮らそう。こうやってたまに海につかれば、きっと人魚も干からびたりしないから」
「それはたぶん……無理だと思う」
まるで赤子をあやすように、人魚はタケルの背を叩いた。
「私は人魚で、タケルは人間。私は、人間にはなれない。タケルが人魚にはなれるけど」
「じゃあ俺が人魚になる」
その会話は、ごく自然なものだった。人魚は人間になれないけど、人間は人魚になれるらしい。それを知って、タケルは迷わずうなずいていた。
「俺も人魚になる。一緒に連れて行って」
「……どうして？」
「人魚と一緒にいたいんだ」
「タケルには家族がいるじゃない」

「それは――」
言葉が出なくて、まるで駄々をこねるように、タケルは人魚の胸に顔をうずめた。
「どうしても、人魚になりたい？　私と一緒に、行きたい？」
「行きたい」
力強くうなずいたタケルに、人魚は手のひらで、波をそっとすくいあげた。
その手のひらには、海の水がたまっていた。虹色の雨が降りそそぎ、人魚の鱗が混じった水を、そっとタケルの口元へとさしだした。
「飲んで。飲んだら、人魚になれるから」
タケルは言われるままに、うやうやしく、手のひらの杯を、唇へと運んだ。
海の水は、塩辛かった。舌の上でじゃりじゃりと転がる鱗は、やけに甘い。味覚がおかしくなりそうで、舌がびりびりする。
鱗が体温で溶けて、やたら舌にまとわりつく。飲み込みづらい。タケルは口の中で、鱗を何度も往復させた。
ふと、頭にアパートのことが浮かぶ。そういえば、人魚になるならここを引き払わなければ。大家さんに挨拶しておくべきだろうか。
いや、失踪するのだし、自殺するも同然だ。なにもいらないだろう。どうせ家族も、自分がいなくなっても気にも留めない。
妹たちは元気だろうか。そういえば自分は、妹たちをあまり可愛がってあげられなかった。

6

「――タケル」

なかなか飲み込めずにいるタケルの頬を、人魚の手が包み込んだ。

ふっくらとした、桜色の唇が、自分の唇に重なる。海で溺れたときのように、するりと舌が忍び込んでくる。

あの時は、それでタケルに空気を送ってくれたのだ。けれど今回の彼女は、その濡れた舌で、タケルの口内をかき回していた。唾液と鱗が混じって、音が鳴る。それを荒れた海がかき消していた。

人魚の舌の動きに翻弄されて、タケルは腰が抜けそうになる。息もろくにできないはずなのに、苦しくない。遠慮がちに舌を絡めると、人魚は抱きしめる力を強くした。

そして長い口付けが終わるころ、人魚ののどが、ごくりと鳴った。

「……にんぎょ」

ほうけた表情をするタケルに、人魚は鱗がついて虹色に光る舌を、ぺろりと出してみた。

「やっぱり、やめた」

そしてそのまま、タケルに背を向けた。

「――人魚！」

彼女は、海に消えた。

優雅に光る虹色の尾びれが、一瞬、水面に現れる。そのしぶきが、タケルの顔にかかる。

タケルは呆然と、二本の脚で、岩場に立ち尽くしていた。

○○○○

自分は溺れ死ぬことができない。

それに気づいたのは、台風が過ぎ去り、海が静けさを取り戻したときだった。

台風一過、とてもいい天気。降りそそぐ太陽の下、タケルは海の底へと泳いでいた。
「――人魚！」
彼女は海の底の、やわらかな砂の上で、ぼんやりと寝転んで空をながめていた。
「……あ、タケルだ」
「これ、どういうことだよ！」
タケルは海の中で、そう叫んだ。
口から、空気が漏れる。肺の空気が少なくなっていく。息を吐いて、空気のかわりに、思いっきり海水を吸い込む。
けれど、苦しくない。
「俺、どうなったんだ……？」
なぜ自分はこうも簡単に、海の中を泳いでいるのか。息が苦しくないのか。そして、やたら魚たちの視線が気になるのはなぜか。声のようなものが聞こえてくるのはなぜなのか。
「なぁ、人魚、聞いてるか？」
「んー？」
彼女は、いつもの人魚だった。無口で、眠たそうで、アパートにいた頃のように、ぼんやりと海から空を見上げていた。
「これは、どういうことなんだよ」
「うん……」
やはり、口数が少ない。タケルは海の底に降り立ち、海草を毛布のようにくるまる人魚の肩をつかんだ。
乳房が丸出しだ。それにすこし、動揺する。
「あの時、鱗を全部かきだしたつもりだったんだけど……残ってたみたい」
「みたいって……」
「大丈夫、完全な人魚になったわけじゃないから」
もういいでしょ。寝かせてよ。そんなそぶりで、人魚は瞳を閉じた。

「おい、寝るなよ。なんで人魚にしてくれなかったんだよ」
あれから、タケルはずっと、人魚のことを考えていた。どうして自分を連れて行ってくれなかったのか。あの時なぜ、自分から鱗を奪っていってしまったのか。
「だって、タケルにはまだ早いと思ったんだもの」
「……早い？」
「タケル、口で言うわりに、まだ未練があるでしょう。家族のこと気にしてる。人魚になるなら、全部にけりをつけたほうがいいと思ったの。長生きすることになるんだし」
ちらりと、彼女が片目を開く。その見透かすような視線。陸上ではなかったその表情に、タケルは反論の言葉を封じられてしまった。
「時間はたっぷりあるわ。その鱗がタケルから消えてしまうのにも、まだ時間がある。消えてしまう頃に、タケルが人間でいたいと思ったらそのまま人間になればいいと思うし、人魚になりたいと思うのなら、今度こそ本当に、あたしが人魚にしてあげる」
「……それって、いつまで？」
「ずーっと、ずっと。たぶん、タケルの気持ちが決まるころ」
ふわあ、とあくびをして、彼女はタケルに手を伸ばした。
「いくらでも、遊びにきて。私はここにいるから。辛いことがあったら泣きにきて。うれしいことがあったら話にきて。でも、自分の世界に、背を向けたりしないで」
「背を……？」
「逃げないで。すべてを決めて、考え抜いて、満足してからここにきて」
「でも……」
「大丈夫よ。考える時間はたっぷりあるから。その間に、いろんなものを見て、タケルなりにいろんなことを感じてみて」
タケルは表情を曇らせる。それじゃあ人魚はなぜ、自分をこんな状態にしたのだろう。
「こうしたらタケルは、溺れ死のうなんて思わないでしょう？」

人魚は、ふふ、と笑った。その笑みは、あのあどけなさなど感じさせない、すべてを悟った笑みだった。
「人魚……」
「その人魚って呼び方も、今日で終わり」
彼女は、タケルの耳元に、唇を寄せた。
「私の名前は――」

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6092f/

にじいろにんぎょ

2010年10月8日15時33分発行